‘紅まどんな’で問題となる病害虫（ｱｵﾄﾞｳｶﾞﾈ）

アオドウガネは柿やブドウの害虫としても知られているが、紅まどんなでは成虫が夏芽を加害する。被害は特定の樹や枝に集中し、それらの新葉を加害する事例がある。改植時等に堆肥を施用した園地で発生が多い。

○生態

成虫は年1回発生する。6月下旬頃から発生し、7月上～8月中旬に最も多くなる。雑食性で、様々な植物の葉を加害する。幼虫は植物の根も加害するが、主に堆肥などの有機物を食べて育つ。

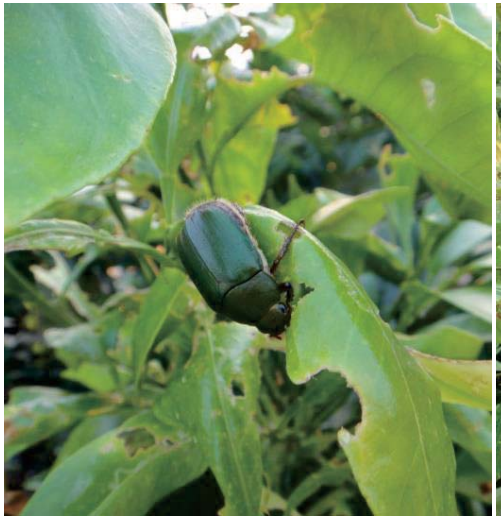
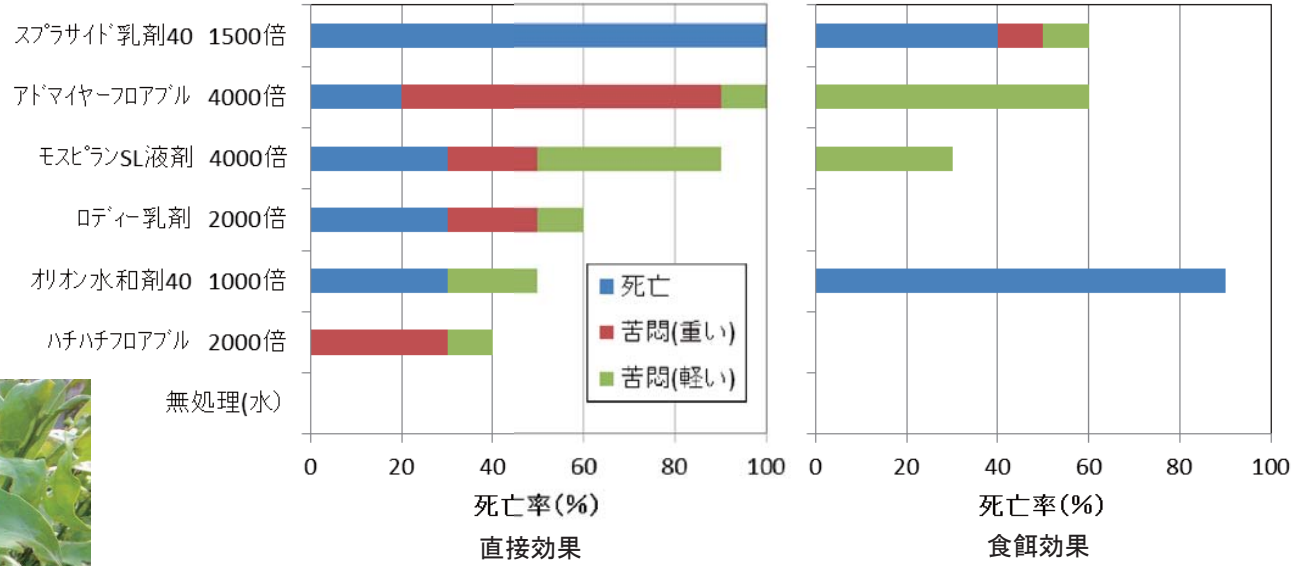


写真1　ｱｵﾄﾞｳｶﾞﾈ成虫

写真2　加害された夏芽

○主要薬剤の成虫に対する効果



注1）直接効果：ﾊﾝﾄﾞｽﾌﾟﾚｰで薬液を虫体に噴霧し、風乾後、無処理の柿の葉を与え25℃の室内で2日間管理

注2）食餌効果：柿の葉を10秒間薬液に浸漬し、風乾後、供試虫に与え25℃の室内で3日間管理

注3）苦悶は死亡に含み死亡率を算出

注4）苦悶(重い)：脚などをわずかに動かす程度、苦悶(軽い)：歩行等するが行動に異常がみられる

かんきつではｱｵﾄﾞｳｶﾞﾈに対し適用のある薬剤は無いが、ｺﾞﾏﾀﾞﾗｶﾐｷﾘやﾊﾏｷﾑｼ類に用いられる薬剤を供試した結果、直接効果ではｽﾌﾟﾗｻｲﾄﾞやｱﾄﾞﾏｲﾔｰ、ﾓｽﾋﾟﾗﾝが高い。食餌効果ではｵﾘｵﾝが最も高かったものの、他の薬剤は低い。